

どう考える「精子の選択」

大津 隆文

ココナ下、週末になると娘夫婦が車で来て年寄夫婦をスーパーへ買物に連れて行ってくれる。買物が終わると四人で茶飲み話、先日の話は孫の大学のレポートだった。

「米国にある聾者のカップル（レスビアン）がいた。二人は聾であることを幸せに思っていて、自分達の子も是非聾であって欲しかった。そのため精子の提供者として五代に亘って聾者である男性を探し出し、願い通り聾の子を出産した」。

あなたはこの事象をどう考えるか、がテーマとのことだ。なお、これは実話で、例の白熱教室のサンデル教授が教材としているようだ。

我が家の四人もいつもと違って白熱の議論を交わした。そのコンセンサスは、世の中の身体的障害に対する差別は少なくなってきたとはいえ、聾者の人生には不便も多いのではないか、たとえ自分達は聾であることを幸せに思っているとしても、意図的に障害を子に負わせるのは親として行き過ぎではないか、ということだった。

聾の子が欲しければ聾の養子を探すという方法もあり、その方がその子も救われるのではないかとの意見も出された。

米国では他人の精子提供による不妊治療は広く認められていて、「精子バンク」も多数あるようだ。そして提供者の人種、教育レベル、身体的特性等幅広い情報を知ることが出来る。つまり選択が可能で、子の人生を運命づける親の責任は重大である。

精子の提供価格も、スーパーモデルや優秀な専門家等人気が高いほど高価というのも米国らしい。他方、現地調査をした山口真由弁護士によれば、ある精子バンクでは一律九四五ドルとのことである。また、精子ドナーは厳選されるが、対価は一回一〇〇〜二〇〇ドルで学生が多いようだ。

日本でも不妊治療のニーズは高まっていて、ネット上には多数の精子提供サイトがある。現在はいわば野放しであるが、精子の安全性確認が必須であるほか、親子関係や生まれた子が自分の出自を知る権利の取り扱い等の問題もある。早く公的なルールを設け不妊治療をサポートすべきではなからうか。